

2017年度大阪女学院中学校・高等学校事業報告書

* 内は2017年度事業計画。項目ごとに報告を記す。なお、Jは中学校、Sは高等学校の略。

I. 建学の精神と教育理念

1. キリスト教に基づく人間理解の深化

大阪女学院中学校・高等学校は女性が一人の人格として、何らかの方法で働く義務を悟り、正直に仕事することを誇りとし、日常生活の雑事を越えて、物事を見抜く力をもつ人間を育むことを目指す。宗教教育については長年の実績を踏まえた上で、キリスト教に基づく人間理解を深め、一人ひとりがかげがえのない存在であることの自覚を促し、生徒自らの生き方と他者とのかかわり方を学ばせる。また、入学後、保護者に対しても、キリスト教教育への理解を深めてもらえるよう努める。

2. 建学の精神の再認識と再構築

本校生徒、教職員の誰もが自分の内面に向き合う礼拝の時間を大切にし、祈りの中で他者に仕える志を涵養することで、国際的なミッションによって設立された女子教育機関という建学の精神を再構築していく。

年間聖句『主の前にへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高めてくださいます。』（ヤコブ4:10）

礼 拝

【中学校】月・水・金は3学年合同でチャペル礼拝、火・木・土はクラス礼拝

音楽礼拝（年3回）、イースター礼拝、母の日礼拝、花の日礼拝

【高等学校】火・木・土は3学年合同でチャペル礼拝、月・水・金はクラス礼拝、英語礼拝（年4回）、

音楽礼拝（年3回）、イースター礼拝、母の日礼拝、花の日礼拝、

英語科英語礼拝（年8回）OCCホール

修養会 J1 7月10日（月）～12日（水）1泊2日 2班編制 宿舎 VIPアルパインローズビレッジ

主題 「あなたが帰るところ」 講師 佐伯淳平先生（Be One Osaka教会牧師）

J2 7月10日（月）～12日（水）2班編制 宿舎 京都・烟河

主題 「輝く人生のために－光を受けて光を放つ－」

講師 玉井幸男先生（カンバーランド長老教会海老名シオンの丘教会牧師）

S1 7月10日（月）～12日（水）2班編制 宿舎 ユニトピア篠山

主題 「君は愛されるため生まれた」 講師 塚本潤一先生（日本基督教団芦屋浜教会牧師）

S2 7月10日（月）～12日（水）2班編制 宿舎 ニューサンピア姫路ゆめさき

主題 「置かれた場所で咲きなさい」 講師 暮林響先生（神言修道会神父）

J3 1月31日（水）チャペル

主題「Before After」講師 鈴木雅也先生（hi-b. a. 高校生聖書伝道協会スタッフ）

S2 1月19日（金）チャペル

主題「あなたの名を呼ぶ神」講師 大嶋重徳先生（K G Kキリスト者学生会総主事）

伝道週間 9月26日（月）～10月2日（日）

主題講演「ほんで結局、クリスチャンって何を信じてんの？－聖書の全体像－」

講師 大嶋重徳先生（K G Kキリスト者学生会総主事）

宗教行事 12月7日（木）クリスマスメッセージ

主題「あなたが必要で、あなただから必要！」「今、平和のために」

講師 桃井和馬（写真家、ノンフィクション作家）

II. 教育の内容と学習支援

上記の教育理念を具現化するため、生徒一人ひとりに与えられた賜^{たまもの}を活かし、社会に貢献するための学力、協調性をもった行動力、自己と他者を大切にすること、人権意識、円滑な社会生活を営むための規範意識、そして世界平和を実現するための国際性を身につけること―「真の生きる力」を養う教育を目指し、教員同士、互いを尊重し、助け合いつつ、教育活動を行う。

国から示されるグローバル人材の育成、高大接続改革等の教育の方向は、創立以来本校が目指してきた教育の理念と重なり合うところから、探究型、教科横断型、アクティブラーニングへの移行を、教育改革の機会と捉えて積極的に取り組む。

また、本校は国際バカロレア・日本語ディプロマ(以後 IB・日本語 DP と表記する)の候補校として2016年6月に認められ、2018年度高校入学生の2年次にDPがスタートする。IBの理念は、上記の改革の理念とも一致するため、IBの教員資格研修にすべての専任教員が参加することとしており、このことは、今後の学校全体の改革に大きな意味をもつと確信している。

・2018年度高校入学生徒から英語科国際バカロレア（以後IBDPと表記する）コースを新設することを決 2017年度中の国際バカロレア・ワールド・スクールの認定を目指し、各部署が一丸となって準備を進めた。その結果、2018年2月末にその認定を受けることが出来、また、1月には内部進学者から7名、及び2月の高校入学試験から2名、合計9名の入学予定者を得て、2018年度4月から正式にスタートすることになった。

このIBDP担当者のみならず、中高専任教員全員がこの教授方法を学ぶことによって、大阪女学院の教育理念をより推進していくことが出来ると確信している。現状では、2017年度末までには専任教員の6割の者がこの研修を終えている。

1. 学力向上・授業内容の充実・探究型学習への取り組み

- ・自学自習できる主体性と自己管理能力を身につけるため、計画的な学習、スケジュール管理の指導を継続する。（0Jダイアリーの改良、学習計画表の活用等の継続）
- ・生徒本人の取り組み、教員の進路指導のあり方を見直すため、個々の生徒の学習状況を学力検討員会にフィードバックし、改善策を検討、提示する。
- ・論理的思考をもとに自らの考えを構築し、表現できる力を育てる。2016年度に導入した中学1・2年生の「論理エンジン」の授業の充実と、国語教科以外の教員との指導内容共有に努める。中3での探究型授業（2018年度～）の準備を進める。→V- 2. (1)アクティブラーニング、探究型学習への取り組み
- ・2020年の大学入試改革を見据えて、中高一貫カリキュラムを見直し、各教科でシラバスの見直しを継続するとともに、宗教・教科学習・人権学習・ボランティア・クラブ・生徒会等のあらゆる活動を関連づけ、総合的なプログラムの構築を目指す。V- 2. (5)英語科 IB(日本語 DP) コースの設置に向けて
- ・英語の外部資格テストに対応した内容を授業に取り入れ、中学・高校では GTEC For Student を複数回全員が受験する。また、高校では GTEC CBT の受験を積極的に奨励する。
- ・英語、数学の分割授業の授業形態、及び中学 1・2 年生の自主学習支援（通称ビッグシスター制度*）によるボトムアップに加え、実力錬成補習、大学入試準備及び直前プログラムを継続、発展させる。
（*ビッグシスター制度…推薦入試で進学先が決まった高校3年生が放課後に中学1・2年生の自主学習を補助する制度）
- ・水曜講座（高校3年文系有志補習）、土曜講座（高校1年、2年有志補習）、BB講座(高校生有志 放課後予備校との提携によるネット配信講座)を継続、充実させる。

- ・スケジュール管理能力と計画的な学習や行事への取り組みの課題は、教員自身と生徒への促し、両面からのアプローチが必要であると考え。改良されたOJダイアリーは使い勝手の良いものとなり、生徒にも好評である。
- ・2017年度も定期的に学力検討委員会を開き、現状の把握の中から、中学における学力の伸長が不十分な生徒への補講のさらなる充実を図り、中学1・2年生時に、ビッグシスター制と並列させた基礎学力定着講座を敷いた。これは一定の成果が認められることもあるが、定着の度合いには差があり、個々の学習能力や特徴に応じた学習方法の探求が課題として残った。また、この講座の担当教員配置、生徒の放課後のスケジュールの両面から調整が必要であることが確認された。
- ・探求型授業の実施は、2018年度中学3年生より、「総合学習」1単位を、課題研究レポート作成を目的とし、ICTを活用することに決定した。また、2018年度高校1年生よりベネッセの「Classi」を用いることで自主学習指導のさらなる発展が見込まれる。
- ・高校2・3年生の基礎学力定着について、ベネッセの「学習動画学習」を導入し、スタディサポートとの併用しながら対策を行うこととした。
- ・高校1.2年の土曜講座。高校3年生文系Ⅰ型のみ水曜講座について、生徒たちのニーズに相応しいものとして見直しをし、2018年度からリニューアルをしてスタートさせる。
- ・その他の自主学習補佐として、従来の「BB講座」に加えて、リクルートの「スタディサプリ」の推奨も行った。
- ・行事の変革については、IBの考え方を参考に、2017年度に引き続き研究、検討を進める。
- ・GTECの校内受験に関して、今後は4技能受験のソフト、ハード両面の準備が必要である。一方で2017年度は外部試験（英検）の中高とも受験者が増え、特に中学3年生では学年の30%が英検準2級以上を取得した。
- ・2018年度2月の論理文章能力検定では、中学2・3年生の3分の2の生徒が、Level6～7を合格した。

2. 高等学校英語科の改革

- ・エンパワーメントプログラムの発展と継続。
1学期から2学期の授業においてエンパワーメントの教材を用いた実践を、次年度も継続、発展させる。
- ・4技能外部検定試験に対応するため、高校の早い段階から積極的に受験を促す。
高校英語科目標 CEFR [B1]～[B2]レベル
英検2級(高2秋まで)、準1級(高3)、TOEIC 600以上(高2)780以上(高3)、GTEC CBT1000以上(高3)

- ・2013年度から始まった英語科改革委員会は、2017年度より、学力検討委員会、英語教科会及びIB委員会に引き継がれている。
- ・高校2年生時に行われているエンパワーメントプログラムも、生徒の成長において充実したプログラムとなっている。

3. 高等学校普通科理系2コース制の整備、充実

- ・受験生及び中学内部進学生のニーズに応じて開設した理系を1類、2類の2コース制を充実したものとし、生徒の志望する進路が保障できるよう整備していく。 →V- 2.(6)高等学校普通科(文系、理系)の充実
- ・高等学校理系を2コース制としてから2年目を経たが、理系1類の理系学習における更なるモチベーション向上が今後の課題である。

4. 国際理解教育の推進

- ・高等学校3年間で実施している現行留学制度(夏期海外研修・短期留学・年間留学)に加え、高校1・2年生時3学期にスタートした中期留学制度の充実を図る。
- ・海外の大学及び国内で国際理解教育を進める。大学への進学を希望する生徒への進路指導を充実させる。
→V- 2.(4)「国際特別入試制度」の継続と発展 (5) 英語科 IB(日本語 DP)コースの設置に向けて
- ・高校1年生対象の夏期海外研修の内容がさらに充実したものとなるように検討、交渉する。
- ・高校2年生対象のシドニー姉妹校 Ravenswoods への短期留学、YFU 主催の韓国・ドイツへの短期留学への呼びかけを継続する。
- ・高校1・2対象の年間留学の説明会(4月、9月)は内容の充実を図り、説明の機会も拡充する。2016年度より創設した高校1・2年生対象の中期留学の説明会を4月と9月に行い、希望者の理解を深める。

2017年8月、年間留学生5名が出発し留学に励んでいる。(カナダ2名・ハンガリー1名・ドイツ1名・アメリカ1名)

- ・2016年度第1回中期留学に引き続き2017年度第2回中期留学も、それぞれが困難なことを乗り越えて、成果を収めて帰国した。(イギリス2名・アメリカ2名)
- ・シドニー姉妹校 Ravenswoods への短期留学制度を2名が利用し、その学びを充実させた。
- ・高校1年生時の夏期海外研修の参加希望者は減少傾向にあり、内容的な見直しを行い、2018年度からはアカデミックなプログラムを取り入れた研修も始めることとした。
- ・アメリカにある Saint Mary's College of California との教育連携を取り交わすべく、国際教育主任が現地を視察した。

5. 生徒の人権意識を深める取り組み

解放教育(人権教育)については、「私たちの人権感覚を問い直そう」～一人ひとりを大切にしよう～という教育目標の下で、次の事に取り組む。

- ・人は皆、神によって創られたかけがえのない存在であることを深く認識し、日常生活において、一人ひとりの生徒が大切にされる解放教育を目指す。
- ・私たちの身近な差別を見つめ、生き方の本質に深く関わっていることを学び、自他(人間)の解放のために何ができるかを考える。
- ・世界の人権の状況を知り、人権を獲得し、守り、発展させていく意味を学ぶ。また、教職員の積極的な校内外研修参加で、解放教育をさらに実り豊かなものにする。
- ・SNSを適切に利用するための知識、メディアリテラシーについて、生活指導委員会と協力して実践的な事例研究等に基づいた生徒向け、教職員向け研修会を計画する。
- ・人権教育全体のカリキュラムを見直し、現代に相応しいものに内容を発展させる。

- ・上記の目標の下に、生徒がお互いの存在を尊重しあうことが大切にされる解放教育を目指した。
- ・世界の人権状況と人権獲得の歴史を学び、守り、発展させていく意味を考えさせ、各学年の発達段階に応じて、生徒自らの人権意識を深める取り組みを、テーマを定めて行った。

【学年別テーマ】

中1 “One for all, all for one.” 一人はみんなのために、みんなは一人のために。

差別・不公平なことが世の中にあることを知る。(様々な人権問題・子どもの貧困)

中2 想像力を豊かに持とう～平和への一歩を踏み出そう～ (大阪大空襲・沖縄平和学習)

- 中3 戦争のない世界をいかに創造していくか ～自分を生きる・他者と共に生きる～
 (沖縄平和学習・沖縄戦の遺品展・部落問題・障がい者学習)
- 高1 多民族との共生と人権 (在日コリアン・アイヌ学習)
- 高2 「ありのままに生きる」～共に喜び共に泣こう！そして共に歩もう～
 ローマの信徒への手紙 12:15 『喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。』
 (アイヌ学習・LGBT(性的少数者)理解)
- 高3 「全ての人の痛みを共に担える社会を創造していく生き方を考える (発達障害・バリアフリー)

【中学平和を考える日】修学旅行の平和学習についての作文発表と映画「この世界の片隅に」鑑賞。

6. 生徒の生活全般に対する指導

生活指導については、中学・高校それぞれの発達段階を考慮しつつ、基本的な生活習慣や社会性を養う。特に、人間関係を構築する力、社会のルール、マナーを守り、礼儀正しく人と接する力、広く社会に目を向け、他者の人権を尊重し、コミュニケーションの中で相互理解を深め、主体的に行動する力を育てる。宗教・解放(人権)教育・生活指導・進路指導の各部門が協力して指導にあたる。言葉遣いや挨拶(全校挨拶運動)、教室の清掃と整理整頓(指導方法の見直し)、基本的なソーシャルスキル、及び生活力の向上に意識的に取り組む。特に、SNSによるトラブル等の生活指導事案の適切な対応について、教員の学びを深め、整備する。

- ・個々が組織に縛られることなく、個性的に生き活きとした学院生活を送ることは大切なことであるが、ともすれば自己中心的な言動に陥ることがあるので、言葉遣いなどソーシャルスキル向上の為の指導もしていかなければならない。
- ・SNSの利用について指導を続けているが、問題行動が繰り返される現状である。定期的に指導を行い、注意喚起を怠らないうにしなければならない。
- ・学校としての学習環境の維持と生徒一人一人の課題克服のサポートの両立を教職員全員で考えていかなければならない。

7. 学校行事による集団作り

生徒がリーダーシップをとり、それぞれの行事の意義、目的に照らして、自主的、かつ計画的に集団を動かしていく力を身につける機会として学校行事をとらえ、協調して互いの力を活かすチーム力を養う。特に、時間、費用、あとかたづけ、ゴミ処理等を、自分たちでトータルに管理していくことができるよう指導する。

特に生徒が中心となって内容を定める行事(遠足や修学旅行の自由行動、体育大会の応援合戦、解放学習の発表、合唱祭の選曲と練習日程、文化祭の企画など)や、クラブ活動は、事前に企画書や練習計画書を提出させ、また活動記録を付け(OJダイアリー、練習日誌など)教員が助言を行い指導する。

- ・昨今の生徒の教育環境の現状として自主性をもって行動できる生徒が少なくなっていること感じ、今後、どのような指導をしていくかを教職員で考えて行きたい。年々生徒たちの互いに関係を構築していく力の低下を感じている。行事による集団作り、クラブ活動の中でのチーム力の養成はますます重要である。生徒一人一人が主体性を持って行動を促すため、指導の方法について教職員で考えていきたい。

III. 教育の実施体制

1. 生徒の安定的な人数確保のための取り組み

1. 生徒の安定的な人数確保のための取り組み

中学校・高等学校 目標生徒数は、学力レベルをできる限り維持しつつ、以下を目標とする。

中学校 190名(募集人数) 高等学校 110名(募集人数) [普通科文系50名 理系30名 英語科30名]

(1) 広報の充実

- a. HP、公式フェイスブックページ等の活用によるリアルタイムでの学校紹介

- b. 卒業生の働き～時代を越えてつながる愛と奉仕の精神～取材広報の継続
 - c. 目的別学校紹介パンフの作成・改良（2015年度作成 2020スキーム、留学、生徒による学校紹介の内容更新）
 - d. 新しい広告媒体の研究と積極的な活用(梅田、京橋、三宮の三駅に展開した映像広告等)
- (2) 説明会・学校訪問への全教員での取り組み
- a. 全教員での在校生の出身公立中学校訪問、校外での説明会、広報活動への参加の継続。
 - b. オープンキャンパス、入試説明会の回数、日程、種類、事前広報の検討。
 - c. 在校生、卒業生の保護者、卒業生による「保護者のためのevening説明会」の継続
 - d. 募集のための新しいイベントの企画
- (3) 入試対策室の充実
- 入試対策副室長を継続して配置する。
- (4) 中学「国際特別入試制度」の継続と発展
- a. 中学「国際特別入試」の拡充と広報をはかり、高校英語科・IB日本語DPコースとの接続を目指し、第1期「国際特別」入学生が高校に入学する2018年度に英語科に、IBコース(日本語DP)設置の準備を進める。
 - b. 「国際特別」入学生の学習プログラムの整備を進め、彼らを中心として国際理解教育を展開するプログラムを検討する。
- V-2-(4)「国際特別入試制度」の継続と発展、(5)英語科IB(日本語 DP)コースの設置に向けて

- ・(1)広報面について、HPや公式SNS、新しい宣伝媒体を用いるなど幅広く展開した。次年度からは多様な動画コンテンツの充実を図り、学校案内DVDも更新する。また、学校公式インスタグラムを開設し、校内の写真や、校外で行われる学校活動の写真を通じて、広く大阪女学院について発信することにした。
- ・(2)説明会について、少人数制の説明会をエリアごとに行ったり、また、高校入試の説明会を12月中旬に設けるなど、受験生のニーズに応じた取り組みを行った。
- ・教職員一丸となって取り組んだ成果により、中学校195名、高等学校は外部より125名の入学生を得た。
- ・(4)について、中学「国際特別入試制度」についても、入学者数は22名と大幅に増え、本校の特色ある入試制度として位置づけられるようになってきた。この要因としては、本校の英語教育への期待に加えて、高等学校に2018年度新設のIBDPコースへの関心が挙げられる。ただ、今後は、国際特別入試による入学生の為に現在行っている週1回の特別授業のシラバスと、更なる発展的プログラムの開設が検討課題である。

2. 中学・高校の組織改善の取り組み

教職員組織が円滑に機能するよう努め、中高一貫教育が更に充実するよう、中学・高校の組織の活性化を図る。若い世代が、中高6学年を偏りなくすべて経験し、どの学年に所属しても一貫教育の展望をもって指導できるように人事配置を行うよう努力する。

また、教職員の世代交代が進む中、本校が大切にしてきた指導やその理念、具体的なスキルの継承と、継承のための具体的な方法の構築(校務分掌アーカイブの保管と引き継ぎ、各分掌や学年業務の若手教員への移行)が喫緊の課題であることから、ベテラン教員の役割分担や配置を考えて人事配置を行う。

- ・ITの活用、AI技術、グローバル化の急速な広がりの中で、日本の教育全体が改革を迫られている。世界基準の英語力、課題解決型の概念学習、主体性、創造性の育成など、従来の学びの理念と方法とが問われている。これまで取り組んできた授業、行事、その他全ての活動について、各々の目的を明確化し、生徒自身が探求しつつ、主体的に取り組めるプログラムに再構築していくことが求められている。よって、ベテラン教員のノウハウを若手が継承するだけでなく、若い世代の発想を先輩教員がサポートすることがむしろ必要な時代である。世代交代ではなく世代協働、踏襲ではなく、必要なスキルの創造へと、学校の教育

プログラム全体を大胆に改変していく時である。国際バカロレア導入のために半数以上の教職員が出かけたワークショップでの学びは、このことに向かっていく土台、原動力となることであろう。

3. 中学・高校図書館機能の充実

(1) 蔵書の充実

学校の教育活動を情報面からサポートするための各種資料・情報を収集する。

(2) 利用教育

- a. 教科と連携し、授業や行事のための各種資料ガイドを作成する。
- b. 図書館を利活用した情報収集、課題解決ができるように支援する。

(3) 図書委員会活動

- a. 読書感想文コンクールの実施、文化祭への参加などの活動を教員と連携して実施する。
- b. 選書、図書紹介、展示、広報など図書館運営に協力を得る。

(4) 広報の充実

HP コンテンツを充実するとともに、Facebook でリアルタイムな情報を発信し利用促進を図る。

(5) その他

IB、アクティブラーニングを視野に入れた環境整備の検討、および IB 資格研修に参加し IB コースのカリキュラムのサポートのための準備をする。

- ・ (1) については、生徒の学習支援、教職員向け教材研究用、行事、キャリア教育関連、IB 関連資料など 1,932 冊、視聴覚資料 43 件を受け入れ、クラブ活動のための雑誌を希望制で 13 種購入した。
- ・ (2) については、課題や行事に関する情報収集ガイドやリストを 19 種作成（アイヌ、沖縄、レポートを書くときの注意点「源氏物語」視聴覚リストほか）。資料展示を 60 種実施（中高向け新書、世界の食事、18 歳選挙権、入試にでてくる有名作家、中 3 が選んだ GIFT BOOK、ヨシタケシンスケ氏ほか）。図書館において授業を実施（解放学習、保健体育の調べ学習、HR で友達に進める本を選び）。中 1 に資料の探し方、レポートを書くときの注意点を紹介した。
- ・ (3) については、図書委員会活動として、生徒が中心となり展示プロデュース、読書週間で本の紹介、文化祭古本市、選書会、ビブリオバトル、カウンター当番などを実施した。大阪府高等学校感想文コンクールの自由読書の部で 1 年生が入選した。
- ・ (4) については、ホームページ、Facebook、ブラックボード、掲示などを活用し情報発信に努めた。
- ・ (5) については、IB コースのカリキュラムサポートのため、学内の定期的なミーティングに出席、IB 主催の資格研修に参加した。

4. 中学・高校教員の人材育成

(1) 大阪女学院の教職員としての全体研修

年に一度の大阪女学院の全体の教職員研修会を継続し、全員の参加を目指す。研修では建学の精神を共有し、その実現に向けて本校の歴史や教育の流れを学ぶとともに、世の中の変化の中で、教育全体が、また本校が直面する問題について情報を共有し、連帯を深める機会とする。

(2) 支え合う組織づくり

多忙を極める中でも教職員が孤立せず、相互に信頼し合い、支え合うことのできる組織づくりのために、「チーム OJ」(新任教員を 10 年目までの先輩教員が迎える一泊・親睦研修)を継続して、事例研究等の学びと親睦の機会とする。

教員のコーチ、ファシリテーターとしての資質を開発し伸ばすため、クラス経営や行事指導のガイドラインの確認、

実践的な研修やワークショップによる事例研究の機会、サポート体制(学年主任、校務担当責任者、管理職、学校カウンセラー等との連携)の整備と充実をはかる。

(3) 他校との連携

キリスト教学校教育同盟の新人研修、中堅者研修、大阪私立学校人権教育研究会の新人研修、その他の研修に積極的に参加することによって、教員のスキルアップを図る。

(4) 新しい学力観及びアクティブラーニングへの対応

学力についての考え方が、「知識・技能」中心から「思考力・判断力・表現力」及び「意欲・経験・多様性」重視への転換を求められる現代にあって、探求型、アクティブラーニングを実践するために、数年をかけて IB 教員資格研修への全教員の参加を目指す。加えて、AV 教室化した環境を活かして、今後数年間で新しい授業の形を模索する。

- ・ 中学 1・2 年生に導入した「論理エンジン」を国語科が主導し、全教員で取り組む。
- ・ 中学 3 年生時に探求型卒業レポート制作のための授業を設定し、思考・表現する力を育成するための教科横断型のカリキュラムについて準備を完了する。
- ・ 英語やその他の教科の一部授業ではすでにアクティブラーニングが行われているが、すべての教科科目で教員のアクティブラーニング力向上を目指す。また、定期試験にアクティブラーニングを意識した設問を取り入れ、それらに対応出来るような授業内容研究に、各教科で取り組む。

→V- 2.(1)アクティブラーニング、探究型学習への取り組み

(5) 人権意識の向上

- ・ 教職員の人権意識を更に高め、授業やクラブ活動での指導はもとより、日常における生徒との関わりの中で、生徒の人権に配慮した指導が十分出来るよう啓発と研修を行う。
- ・ いじめ、キャンパスハラスメント事象の発生を未然に防ぐため、学校全体で積極的に取り組む。キャンパスハラスメント規程、委員会の存在を、生徒、保護者、教職員に広く知らせて、いつでも相談できる体制づくりに努める。キャンパスハラスメントに関する調査を継続して行う。
- ・ 多忙な中でもコミュニケーションをよく取り、互いに支え合い、現状の課題について話し合える教職員集団であることを目指す。
- ・ 2017 年度の春は解放の主催で、秋は生活指導委員会と連携して教職員対象学習会を行う。また夏に教職員対象のフィールドワークを実施し、広い視野と正しい知識を養う機会とする。
- ・ 中学の修学旅行の行き先が、地震の影響で暫定的に沖縄に変更となったため、日キ教連・西浦昭英氏主催の「沖縄 平和への旅」の参加を教職員に促し、沖縄に対する人権意識の向上と正しい知識を養う。

- ・ (1)について、以下の日程で、教職員の人権的な学習会、及びフィールドワークを行った。

6月9日(金) 講師：西谷 文和さん(フリージャーナリスト)

「戦火の子どもたちに学ぶ」

7月17日(日) フィールドワーク 「リトル沖縄」を歩く(大阪市大正区)

案内・講師：金城 馨さん(関西沖縄文庫)

10月13日(木) 講師：木村 泰子さん(元大阪市立大空小学校校長)

「みんなの学校が教えてくれたこと」

- ・ (1)～(3)について、働き方改革が叫ばれる昨今だが、教員は学級運営、学力保障、保護者対応、クラブ活動など、多岐にわたる業務を担っているため、時間と仕事量の管理が難しい。ストレスを抱え込まず、互いにコミュニケーションをよくとり、助け合う関係を築いて行きたい。そのため、新任教員が孤立せず、同年代や少し上の教員と助け合うことのできる関係を育む機会として、1泊2日の新任研修「チーム0J」を5年間続けてきた。礼拝、事例研究、演劇ワークショップなどのプログラムを行ってきたが、宿泊で研

修に参加することの負担が大きく、2018年度からは形を変え、他校との連携も含めて、キリスト教学校教育同盟のカウンセリング研究主催の事例研究会等に参加していくこと、親睦のための食事会を催すこととした。

・(4)について **Ⅲ-2 中学・高校の組織改善参照**

・(5)について、2017年度は、キャンパスハラスメントに関わる事象が生じた。その反省に基づき、防止取り組みのために2018年度には大阪女学院全体で防止委員会主催のキャンパスハラスメント学習に全教職員が参加することとする。

5. 中高大短 連携プログラムについて

キリスト教・解放(人権)・英語の3分野を中心にして連携し、大阪女学院独自の進んだ教育プログラムを生み出す。また、キリスト教学校教育同盟と連携しながら、時代の求めに応じた宗教教育を実施していく

- ・高校英語礼拝(年6回)のうち1回は、大学のネイティブの教員(クリスチャン)に奨励を依頼する。
- ・高校英語科の行事(高1英語キャンプ、高2マルチカルチャーデー)に、大学のネイティブの教員に講師として継続的に参加を依頼する。
- ・チャペル礼拝、伝道週間のクラス礼拝の奨励者を大学、短大の教職員(クリスチャン)に依頼する。
- ・英語礼拝の奨励者を大短のネイティブ教員(クリスチャン)に依頼する
- ・グローバル進路を希望する生徒・保護者が、海外での留学経験のある大学教員に提案、助言等を受けられるよう、連携の仕組みを検討する。
- ・社会的かつ国際的な問題に強い関心をもつ中学生の要求に応えるため、教育研究センターが主導して大学院で行われている「核廃絶のプログラム」などの研究に少人数の中学生のグループを参加させるといった連携プログラムの創設を模索する。

一年一年、中学・高校と、短大・大学が、互いの教育内容を理解し合い、様々な場面で協力できる形が生まれてきた。短大・大学の特色を正しく理解して進学を希望する高校生が増えていること、礼拝での教職員の交換メッセージの継続、オール女学院で運営する小学生女子英語暗誦大会ーウエルミナジュニアカップの成功、東北ボランティアキャラバンに、短大生・大学生の参加など、日常的かつ本質的なところでつながりが深められている。

私学人研にんげん研究会のオープンセミナーに大阪女学院大学の奥本京子先生を講師として招き、ワークショップを行い、大阪女学院中高教職員4名が参加した。

IV. 生徒支援

1. 生徒の自己実現を促す進路指導

(1) 進路選択への指導、助言

- ・2020年度大学入試より大きく入試のシステムが変化し、高校2年時に基礎学力試験が高校3年時に大学進学希望者への学力試験が実施されることとなる。各自の進路目標を高校2年時点で明確にしていけるように、中学での進路活動を特に重視し、中高を通しての進路ガイダンスの更なる充実を図る。
- ・「生徒一人一人を大切に」という基本理念のもと、個人面談における学習への動機付け、学習方法の指導、進路情報提供等を充実させる。

【進路キャリアガイダンス】

生徒一人ひとりが、中学・高校と進路ガイダンスの流れの中で、進路実現に向けモチベーションを持続し、主体的に学習し学力をつけるための支援を行った。

中学1年

2 学期 進路説明会 中高一貫教育の中での高校進学、進路指導の流れについてのガイダンス

中学2年

2 学期 「生徒の就きたい職業アンケート」より、12 分野の同窓生来校。先輩からの進路ガイダンスを実施。

3 学期末 進路 HR : リクルートによる講演「未来に必要な力」/高校のコース説明/卒業生の体験談

中学3年

1 学期 夢ナビプログラム実施。自分の興味がどの学問分野に繋がるかを知り、高校コース選択へと導く。

2 学期末 京都造形芸術大学吉田大作先生による講演：

「Time Design～時間の問題を解決する」により進路意識を整理する。

3 学期末 Classi にログインし、基本操作を学び、新入試に備えた。

高校1年

1 学期 夢ナビプログラム実施。6 月 17 日（土）全員が夢ナビライブに参加。志望する学問分野を探究。

2 学期 学問分野別進路ガイダンスを実施。

高校2年

2 学期 大学別進路ガイダンス実施。

3 学期 駿台講師による進路講演「第 1 志望合格に向けて」春休みに向けてモチベーション up を図る。

卒業生の受験体験談

高校3年生

第一希望の進路実現に向けて、またそれがかなわない場合も、最後まで次の希望進路実現に向かうため、昨年に引き続き入試直前サポートの取り組みを強化した。

***センター試験対策** 7 月 センター試験 英語・現代文の解説授業を実施。

12 月 センター試験予行後、代ゼミ講師による解説授業を実施。

***私大入試対策** 英語 2 講義、現代文 1 講義、古典 1 講義を実施。実践に向けての取り組みとなった。

***進路講演会**（河合塾講師）：入試本番に向けての姿勢と意欲を喚起。

***3 学期 入試直前講習**

1 月の始業日からセンター試験までの 1 週間を「センター対策期間」、センター自己採点返却から 1 月末までの 1 週間を「国公立 2 次・難関私大対策期間」、質問室を設け、時間割を組み教員が対応、さらに講義室を 2 教室確保しての直前講習を実施した。

自習を基本とし、朝終礼、礼拝から始め 1 日のリズムを保って、受験勉強を充実させるサポートを行った。

今年度も 18 歳人口の減少とともに受験生は現役生の志願者数が上昇しており、現役生がしっかりと目的意識をもって取り組んでいくことが進路実現につながる入試になってきている。本校ではセンター試験受験者は 179 名(300 名在籍)。全国の平均点よりも学年全体の平均点は高く、センター試験を受験する生徒はよく努力していた。全国の志望動向については、はっきりと文高理低の傾向になっている。その中で国公立には現役生が 18 名、過年度生が 5 名合格した。依然として後期試験の合格者が少なく、私立に切り替えた傾向があった。また関関同立 4 大学の合格者数は現役生で 159 名（延）であった。指定校推薦・協定校推薦による影響があり、一般受験の数の減少が大きい。また、私立大学入学定員厳格化の影響を受けた一般受験であった。次年度以降も厳格化は進む。多様化する大学入試の中で戦略的な受験が合格につながる事が明確になってきている。大学改革の中で、各大学の留学制度が急速に充実しており、大学での留学を考える傾向がみられ、海外進学は 10 名となった。英語外部検定試験を用いる入試が、AO 入試・公募推薦入試においても多くなり、一般試験にも増えてきた。大学入試改革に向けて、さらに一歩進んだという感がある。

センター試験受験者数の推移

		2016年卒 (291人)	2017年卒 (289人)	2018年卒 (300人)
センター出願数		182 (62.5%)	171 (59.2%)	179 (59.7%)
2次試験受験数 (四年制大学)	国公立	延人数 153 実人数 93 (32.0%)	延人数 111 実人数 68 (23.5%)	延人数 104 実人数 70 (23.3%)
	私立	延人数 382 実人数 116 (39.9%)	延人数 308 実人数 100 (34.6%)	延人数 303 実人数 101 (33.7%)
合格数 (四年制大学)	国公立	32	25	18
	私立	101	87	58

*国公立大学の推薦入試はセンターの有無にかかわらず含んでいます。

() の内の%は卒業生数に対する比率

2018年卒業生 進路状況

(最終進路)

		進学				就職	その他	合計
		大学	短大	専門学校	留学	予備校		
人数		225	19	5	10	40	0	300
%		75.0	6.3	1.7	3.4	13.3	0	100
%		81.3						
%				83.0				
%					86.4			
%						99.7		

関西・関西学院・同志社・立命館の入試結果

2018年3月卒業生 (現役生)

	関西	関西学院	同志社	立命館	計
延 受験者数	189	221	144	137	691
合格者数	44	59	33	23	159
合格率 (%)	23.3	26.7	22.9	16.8	23.0
実 受験者数	72	96	63	54	
合格者数	27	52	24	16	
特推を除く実受験者数	68	68	56	52	
(特推を除く)実合格者数	23	24	17	14	
(特推を除く)合格率 (%)	33.8	35.3	30.4	26.9	
特推 (指定校・協定校推薦)	4	28	7	2	41
入学者数	9	42	23	8	82

	大学	短大	その他	合計
普通科	155 (72.4%)	13 (6.1%)	46 (21.5%)	214
英語科	70 (81.4%)	6 (7.0%)	10 (11.6%)	86

(2) 基本的学習習慣の確立

- ・毎日の授業に取り組む姿勢を丁寧に指導する。
- ・定期試験2週間前に発表される試験範囲に沿った学習計画と準備を徹底させると同時に、テスト勉強だけにとらわれず、将来の進路を見据えて、毎日の学習計画と努力目標を設定するよう指導する。
- ・中学では 0J ダイアリーを改良し、自己管理の取組みを継続、学習習慣を身につけさせ、学習意欲の向上を目指す。
- ・中学 1・2 年生の自主学習支援 (通称ビッグシスター制度*) は継続していく。

(*ビッグシスター制度…推薦入試で進学先が決まった高校3年生が放課後に中学1・2年生の自主学習を補助する制度)

- ・提出物の期限厳守、補習への全員参加等、すべての生徒への自己管理意識向上の指導を徹底してきた。
- ・2週間前の試験範囲発表により、定期試験の準備に取りかかる意識づけができています。中学・高校共に 0J ダイアリーの活用が身につけている生徒が増えてきた。
- ・ビッグシスター制度はS 3 担当生徒への事前のレクチャー・指示を明確にすることで、対象の中学 1・2 年生徒のモチベーション、習慣づけに役立った。
- ・中学生対象の学習支援はビッグシスター制度をさらに発展させた形で行われ、学習支援担当の教師による少人数指導の講座を設け、一定の成果が見られた。
- ・2018年度高校1年生から、ベネッセの「Classi」を用いて、自主学習管理の向上に役立てていく。
- ・生徒が自立・自律し、基本的な生活・学習習慣を定着させ伸ばすために、学習・行事・クラス経営における教員の役割を見直し共有すべき時期にある。ファシリテーター、コーチとしての観点から、生徒へのアプローチの再構築が検討課題である。

(3) 英語の外部検定試験化への対応

大学入試改革の一環として英語の外部検定試験化が本格的に始まり、2021年度完全外部検定化を目指して加速することが予想される。外部検定試験に備えるため、授業内容の変更、講座の開設、日曜日のクラブ活動のあり方等、具体的な検討課題に取り組む。英検とGTEC CBTの受験日を掲示し、受験を勧める。

- ・協定校をはじめ、推薦入試では英語の外部検定試験のスコアがエントリーの必須条件であることになり、資格を取っておくことの必要性がさらに高まってきている。英語科主事を中心として高校全体で、英検の受験を勧めてきた結果、受験者数が激増した。また、中学生にも拡げてアピールを強化した結果、中学生の中で英検2級合格者が増えていることは、成果の表れである。
- ・日曜のクラブ活動の予定について、英語外部資格試験の受験日を優先して組むように呼びかけてきた結果、受験希望者への配慮が行き届くようになった。今後もさらに日曜のクラブ活動の在り方を検討し、受験機会を保障していく必要がある。

(4)新しい大学入試への対応

- ・年ごとに大きく変化する大学入試において、生徒たちの希望する進路が実現するよう的確な情報の提供に努める。
- ・2020年度からの大学入試の変化に対応できるよう、教育内容を改革していく。
- ・新しい入試制度では、高等学校時代に勉学のみならずクラブ活動・ボランティア活動など様々な活動を経験していることが求められる。宗教教育や人権教育での実践と進路との関係性をさらに強め、実践のプログラムを推進する。
- ・志望理由や大学での学習計画を作成する際に、大学、学部の特色を踏まえた上で、自分自身の目指すところを明確にし、論理立て文章化できるように指導していく。
- ・教科学力模試に加え、文部科学省が推進する「学力の3要素」を含む総合アセスメントテストの導入、実施を検討していく。→Ⅱ. - 1. 学力向上・授業内容の充実・探究型学習への取り組み

- ・年ごとに大きく変化する大学入試において、生徒たちの希望する進路が実現できるよう的確な情報の提供に努めた。
- ・2020年度からの大学入試の変化に対応できるよう教育内容の改革について学力検討委員会、各教科で検討した。
- ・新しい入試制度では、高等学校時代に勉学のみならずクラブ活動・ボランティア活動など様々な活動を経験していることが求められる。宗教教育や人権教育での実践と進路との関係性をさらに強め、実践のプログラムを推進する。
- ・今年度のA0入試・推薦入試では活動内容から受験生の総合的な人間力が評価される傾向が強まり、新しい大学入試への移行が始まっていることが顕著である。入試では「経験」とともに、その「経験」について「語れるもの」を持っているかどうか問われる。宗教・解放プログラムの一環として必ず振り返りを行い書いている感想文、クラス礼拝で生徒各々が発表するスピーチ等の準備、推敲による内容の吟味こそが総合的な力の獲得につながるものとして取り組みを継続してきた。
- ・以上のことから、高校1・2年生にベネッセの「マイポートフォリオ」を活用させて、日々の記録を積み重ねていくことを指導した。また、2018年度高校1年生から、ベネッセの「Classi」のポートフォリオ機能を十二分に活用させていきたい。
- ・昨年度より中学1・2年時で導入した「論理エンジン」中学3年生で今年度スタートする「探究型学習」、内部進学出願のための志望理由書の提出、高校3年生では志望理由書、小論文指導などにも学年、担当教科で力を注いできた。今後も継続推進する。

(5)大阪女学院短大・大学という併設の特色を活かした進学指導

併設短大・大学の優れた英語・国際教育、留学や他大学への編入プログラム等を視野に入れ、特色を活かした進路指導を行うよう工夫をする。

- ・併設大阪女学院大学・短期大学の入試の多様化にともない受験の機会が増え、今年度は学内選抜とは別に、一般試験を受験する生徒が数名あった。大阪女学院大学・短大の特徴や魅力、内部進学の特長を生かしての受験指導を進路HRで行ってきた結果である。また大阪女学院大学・短大に進学した卒業生が成果を上げ、希望大学への編入、留学、希望の職種での就職など、自身の力を伸ばせる大学・短大であることを証明していることも併願受験者の増加に繋がっている。

(6) 協定校推薦枠の拡大

- ・2017年度入試より、関西学院大学への協定校推薦枠が40名となった。被推薦生徒の学力向上のために英語の外部試験での基準を設け、確かな英語力を習得するために指導を強化する。また、関西学院大学、同志社女子大学、神戸薬科大学、神戸女学院大学の各校と協定校として高大連携を深める。
 - ・協定校推薦による入学者の大学入学後の学習状況についてアンケート調査を行い、学習への真摯な取り組みを促す。
 - ・高校1年生から英語の外部検定試験（4技能）の受験を勧め、高校2年生までにCEFR [B1] に相当する英語資格取得を目指すよう指導する。
- ・協定校の被推薦者には2～3学期にTOEIC450点以上をめざしての英語学習を勧め、ほぼクリアできた。
 - ・関西学院大学の協定校推薦枠が40名となり、それに伴い一般入試挑戦の受験生が減少。今後もこの傾向は続くと考えられる。
 - ・神戸薬科大学の高大接続として、夏期セミナーに薬学部を志望する高校2・3年生の生徒が参加した。

2. 心身の健康と安全を守るための生活指導と生徒支援

- ・授業・学級活動・生徒会活動・クラブ活動・その他の活動が安全かつ充実したものになるように努める。
 - ・自ら健康の保持増進を図ることができる能力を育成する。そのため保健室・教育相談室（学校カウンセラー）、サポートルームが連携し、生徒・保護者をバックアップする。
 - ・不登校や発達障がいなど支援を必要とする生徒をサポートするため、「支援教育委員会」を充実させ、支援のための学校チーム力を向上させる。
 - ・サポートルームについては、指導員が保健室と連携しながら、利用生徒の成長に寄り添う支援をさらに進める。支援教育アドバイザーのアドバイスをもとにして、支援を必要とする生徒への教員の指導力を高める。
 - ・教職員が特別支援について学ぶ機会を保障し、特定の生徒への支援スキルの向上が、すべての生徒の支援に結びつくように、意識を高めていく。
 - ・必要に応じて生徒の主治医や関係機関と連携をとり、適切な支援を目指す。
 - ・生徒の言動・表情・着衣などを注意深く観察し、虐待の懸念・精神不安のある生徒を見逃さないよう、異常の早期発見に努める。
 - ・通学時の安全指導に努め、不審者から生徒を守るために警察と連携する。
 - ・学校外での生徒の事故やトラブル、迷惑行為等の窓口となり対応する。
 - ・スマホ依存、SNSへの書き込みによるトラブル、悩みに対するサポート指導を、保護者と連携して進める。
- ・支援教育に関わる生徒は多様化してきていて、虐待に関する生徒の報告も増えてきている。また、小学校あるいは中学校時代から不登校であった生徒も増え、スクールカウンセラー、教職員で対応をしているが、中途退学に繋がるケースも増えてきている。
 - ・通学時の安全指導に努め、不審者から生徒を守るために警察と連携する。
 - ・学校外での生徒の事故やトラブル、迷惑行為等の窓口となり対応する。

- ・スマホ依存、SNSへの書き込みによるトラブル、悩みに対するサポート、指導を、保護者と連携して進める。健康診断を通して、伝染病等の早期発見に努める

V. 改革・改善

2017年度の課題として、とりわけ以下の項目について重点的に取り組む。

1. 時代の求めに応じたキリスト教教育の充実と推進

「建学の精神」であるキリスト教教育への認識を深め、愛と奉仕のメッセージを具体化するような企画、調査、発表、社会貢献等の活動の機会を設ける。また道徳教育に関する課題についてはキリスト教学校教育同盟と連携して対応する。

- ・本校の宗教教育の特徴を再認識する機会として、キリスト教学校教育同盟関西地区によるカウンセリング事例研究会、新任教師研修会、全国聖書科研究集会に参加した。また9月22日（金）に市川和恵 先生（日本基督教団教師・元大和キリスト教会牧師）を招いて職員礼拝を行い、「理想と現実の狭間で」悩みを抱えている教職員のために聖書からの励ましを聞き、また卒業生としての心強い勧めを与えられた。

2. 生徒の学力向上について

(1) アクティブラーニング、探究型学習への取り組み

- ・2018年度入学生より、高校英語科に IB コース(日本語 DP スタートは高校2年次))の設置を目指して、教職員全員で探究型、教科横断型アクティブラーニングについての学び、研究を進めると同時に、IB コースだけでなく、中高すべての授業でアクティブラーニングを展開することを目指す。→Ⅱ. 教育の内容と学習支援
- ・中1・3に導入した論理エンジンによる指導を継続し、中3での探究型卒業レポートの作成授業の準備を行う。→Ⅱ. - 1. 学力向上・授業内容の充実・探究型学習への取り組み

(2) 施設の拡充、自主学習のための制度の充実

- ・中学校校舎・高校校舎の質問コーナーの拡充について検討する。
- ・BB 講座に英検講座(外部検定対応)のみ受講できる制度をつくり、高校1年生での実施を検討する。
- ・南校舎1階のMM2教室前の広場を整備する。

- ・南校舎1階の共有スペースをカーペット敷きにして、本棚、机、椅子を配置し、English Loungeとして、英語を母語とする教員が、授業外で英語教育、コミュニケーション能力育成のための活動ができるよう、国際特別授業での使用の他、自習スペースや活動スペースとして整えた。
- ・国際バカロレアコースの設置に伴い、旧来あった小型の選択教室を、同コースのホームルーム教室として整備した。

(3) 英語科、教科としての英語の改革の継続 →Ⅱ- 2. 高等学校英語科の改革

- ・4技能外部検定試験に対応するため、高1～3各学年2単位の、系統だった資格試験対策を継続、発展させる。英検以外の資格試験として、従来のTOEICからGTEC CBTにシフトしての指導を継続する。
- ・高2英語科全員参加のエンパワーメントプログラムの内容を、さらに発展させる。そのため1学期、2学期の授業においてエンパワーメントの教材を用いた実践を次年度も継続する。
- ・英語の外部検定試験に対応するため、英語教員への受験のための補助や、新カリキュラムやアクティブラーニングに対応するための中高独自の英語研修のシステムを研究し、実現を目指す。

(4) 中学入試における「国際特別入試制度」の継続と発展

- ・中学「国際特別入試」の拡充と広報をはかり、高校英語科・IB(日本語 DP)コースとの接続を目指す。
- ・中学国際特別入学生の学習プログラムの整備を進めると同時に、内部進学生のIBコースへの接続を意識し、中学英語キャンプ、短期語学研修、エンパワーメントプログラム、ボランティアワークなどのプログラムの開発を目指す。

- ・国際特別入試による入学生は前年度比170%となった。今後広報とともに、今後IBのMYPを中学に導入するなどを検討し、学校全体でより国際的な教育を進めていくことが検討課題である。

(5) 英語科 IB (日本語 DP) コースの設置に向けて

- ・IB 教員の資格研修に毎年相当数の教員が受講できるように予算を含めて計画していく。
- ・カリキュラムとシラバスの開発をはじめ、授業内容、施設設備、広報等の準備を進め、コース要覧の策定を行う。
- ・コアプログラムの理念を全校でシェアし、国際理解教育を進める。
- ・海外の大学及び国内で国際理解教育を進める大学への進学を希望する生徒への進路指導を充実させる。
- ・教職員、生徒のアカデミックオネスティー（学問的誠実性）についての意識を向上させるよう取り組む。また、剽窃チェックのためのPCソフトの導入を行う。
- ・CASのカリキュラムとして、現在の宗教・人権学習・ボランティア・クラブ・生徒会・体育等の活動への取り組みを再構成する。

- ・2018年2月末にIBOより、IBワールドスクールに認定を受け、2018年度4月よりIBコースをスタートした。内部進学生7名、高校入学生2名の9名がIBコース入学生となった。IB導入を、学校全体の教育プログラム、評価軸を見直す契機とすることを当初からの目的としているため、今後、IBコースのための学びを全教職員でさらに深め、各自の授業、学校活動全般を改革していくモデルとしていく。
- ・また、IBクラスの生徒・教員間の情報共有およびアクティブラーニングを進めるためICT化を進めた。インフラとして校内の無線LAN敷設、ハードウェアはChrome Bookを採用することを決定した。

(6) 高等学校普通科（文系、理系）の充実

- ・高校受験生及び内部進学者のニーズに応じて開設した理系を1類、2類の2コース制を充実したものとする。1類からは幅広く大学理系学部へ、2類からは難関大学理系学部への進路保障のため、カリキュラム、シラバスの整備と充実を図る。
- ・普通科文系コースの生徒のモチベーションアップと多様な進路志望に応えるため、カリキュラムとシラバスの充実、特別プログラムの新規開発を検討・実施する。

(理系)

- ・2017年度に実施した理系プログラムは、卒業生による7月の理系セミナー（全理系生対象）、夏休みに実施された神戸薬科大学実習、同志社女子大学薬学部実習、信州研修旅行、阪大実習（いずれも有志）、12月の奈良女子大学訪問（S1理系対象）、3月の理系セミナー（S1, S2理系生対象）などであった。どのプログラムも参加者は一様に充実した時間を過ごし、理系へのさらなる意識付けになった。

(文系)

- ・本年度より、高校1年生対象の文系セミナーを開催し、各界で活躍する文系出身者卒業生の講演から学ぶ機会を持った。
- ・高校2年生対象のコース別説明会において、スタディサポートの結果分析から、到達段階別に対策を考える機会とした。また、大学訪問は16回を数え、生徒の進路意識や学習意欲向上につなげた。

(7)新指導要領完全実施の中での教育課程の見直し

高校の新指導要領改訂を受けて行われる2020年度からの大学入試に向けて、必要なところは柔軟に見直し、改訂を行う。

- ・理念としての教育課程の見直しは、IBの学びと重なり合うところから、現在進めている取り組みを継続していく。同時に、教科ごとの一つ一つの改訂については、タイムスケジュールを決めて、確実に対応していく。英語資格試験への対応をはじめ、大学入試改革への対応については進路部長を中心に情報を収集し、適切な時期に生徒・保護者に伝えていく。
- ・中学の教科学習ではレポート評価の案分増加を提言したり、外部英語試験の積極的受験を促した。

3. 留学の充実

YFUの年間留学生受け入れに加え、オーストラリアのRavenswood校(姉妹校)との交換留学、カナダのオタワにあるLongfield Davidson校(姉妹提携校)、YFU韓国からの短期交換留学(1ヶ月)などの交流を通して、国際(異文化)理解への取り組みを深める。また、中期留学(カナダ・アメリカ・イギリス)、交換留学制度を利用して、留学を希望する生徒の支援を行い、国際理解、異文化理解に取り組んでいく。

年間留学、中期留学、短期留学、夏期海外研修の説明会を校内で開き、留学を希望する生徒に対してサポートを行う。中学生対象の英語研修プログラムについて検討する。

- ・中学生対象のエンパワーメントプログラムを2018年度よりはじめることとしその準備を行った。
- ・今後もより実践的な国際理解教育を進め、短期の海外プログラムを検討した。

4. ICT教育の推進

当初2020年度実施が提唱されてきた「全ての中学生にタブレット型の情報端末を配布し、それを利用した教育」だが、デジタル教科書が予定より遅れ、2020年度の小学校・2021年度の中学校新指導要領実施と同時期実施予定となった。新たに設置された「2020年代に向けた教育の情報化に関する懇談会」の動きを注視しながらICTの準備を適切な時期に進めていく。

- (1) Wi-Fi環境の整備をすすめる。特に、2018年度からIBに関係する教室等については、早い段階でWi-Fiを整備する必要がある。東・北校舎全体、南校舎全体のWi-Fi環境の整備計画を2017年度中に策定し、順次工事を行う。
- (2) 管理職・運営委員会メンバー、モニター教員にタブレット型情報端末を配布し、研究を進める。
- (3) 中学1年生(高校1年生)の入学時のタブレット型情報端末を、配布時期を想定し、その際に克服しなければならない課題等について検討する。2020年度に導入される新テストではタブレット型情報端末を利用する案も検討されている。2018年度高校1年生にタブレット型情報端末を配布する必要性が生じる可能性を視野に入れてその準備について研究する。
- (4) (3)を実施するために、中学1年生(高校1年生)のメディアリテラシー教育及び使用ガイドラインの作成を進める。またタブレット型情報端末を使用することが優位であるカリキュラムや学習方法(オンラインでの双方向性討論型授業、リアルタイムでの意見集約、創造的な作業学習など)とともにセキュリティーシステムの導入についても研究する。
- (5) 教師、生徒のタブレット管理はもとより、セキュリティーについても対策を検討する。

- ・(1)について、南・北・東校舎全館にWi-Fi環境設備工事を3月末までに終えた。また、情報の一元管理とセキュリティー強化のため、今後教員のクラウド運用を提言し、一部試行した。
- ・(2)については、専任の教職員全員にタブレット型端末機（Clomebook）をもつことを決め、その整備にあたった。しかし、教師が端末を一定期間置き忘れたり、Classiなどをログアウトしないまま紛失した可能性がある場合のデータ流出有無の確認方法や、データ流出が心配される場合のデータ避難方法の確立が必要である。

5. 中学・高校教務の新（入力）システムの導入準備

成績処理等のための入力に関しては、大阪女学院独自のシステムではなく、新システムに移行することも視野に入れ、教育委員会の動きを注視しつつ、多くの学校の採用している入力システムを本格的に研究する。

- ・2019年度から新入力システムに移行するため、打ち合わせを開始した。
現行システムでの改善点（5段階でミス入力のある場合、印刷前に知らせるなど）を盛り込み、よりミスの起こりにくい処理システムを目指していきたい。同時に、教員の評価への積極的な姿勢を促すようにしていきたい。

6. 組織の再構築と運営方法の見直しの継続

- ・教員1週2休による学校運営のため、情報を共有するシステムを新たに構築する。学年主任が研修日等で不在の場合に代行を担当団で一人決め、学年としての迅速な対応を確保する。またクラスの垣根を越えて学年団全員が学年全体の生徒を見る意識を常に持ち、一人ひとりの教員が臨機応変に判断する力、迅速に対応する力を身につける。
- ・平日の放課後のクラブ活動を充実させることにより日曜日・祝日のクラブ活動を縮小させ、部員・顧問の休養日を確保する。また、日曜日の教職員の教会出席を奨励し、学校以外の共同体を教職員が持てるようにする。
- ・クラブ活動についても生徒・顧問ともに過度な活動によって疲弊しないよう責任顧問は事前に計画書を提出し、管理職でチェックし、必要があれば改善を促す。また顧問や外部コーチを含む適正な人員配置を目指し調整する。
- ・IB研修や各所で開催される様々な研修への参加以外に、中高独自の研修システムを検討し構築することによって、教員の疲弊感を軽減し、資質の向上を計る。

7. 学校危機管理についての検討

- ・危険と危機、管理を区別し、事前・事後の対応について検討、緊急時における決定権順位の再確認を含め、文書化を進める。
- ・特に大地震を想定した危険回避訓練、およびダメージコントロールの観点から事後の生徒、教職員の緊急避難生活を想定し、準備ならびにシミュレーションによる想定訓練を管理職・教職員で進める。生徒教職員に必要な食料と水の備蓄の拡充、自宅への連絡方法の確認、帰宅困難者が出た場合の対策を進める。
- ・地域の避難所として一部校舎を提供することを視野に入れ、地域と協力して災害の対策について検討する。
- ・学内の安全管理の観点から、早急に歩車分離の施策を検討する。
- ・文化祭・体育大会など来客の多い学校行事の警備を継続して徹底していく。
- ・個人情報や重要な情報の漏洩を防止するため、将来的にデスクトップには共用で据え置きのパソコンを設置し、データは学内のサーバもしくは学校指定のクラウドに保存することを検討する。

- ・学院全体で予算化し、初動の危機管理マニュアルを策定、学院の全教職員・生徒・学生に配布した。災害備蓄品・災害備品の購入を進めた。現在全てのジャンルを網羅した危機管理マニュアルを策定中である。

8. 経費の削減と効率化

少子化、不況による中学受験者数の減少、私学への経常費補助の削減などの厳しい財政事情の中、事務の一元化、諸経費の見直しを継続して行い、管理部門の経費のさらなる削減と効率化を図る。また、大阪府をはじめとした教育に関する補助金制度を有効活用する。

- ・2030年に向けて段階的にダウンサイズする基本方針を確認し、各部門収支の健全化を検討した。
- ・3月に行った全校舎Wi-Fi整備の工事費用については、補助金制度を活用した。

9. 教員の労務環境改善

- ・教員の1週2休(2週間時間割は継続)制度の維持と改善に努め、より働きやすい職場を目指す。
- ・育児休業規程の育児短時間勤務を「3歳まで」から「小学3年生まで」と改定、介護休業規程についても検討を進める。

10. 施設・設備の保全・充実

2017年度も引き続き、南校舎の外壁塗装を行う。チャペルの空調及び校舎の空調設備についても、優先順位を決めて工事の計画を進める。

- ・2018年度入学生は中学、高校とも定員を満たすことができたが、受験生の減少は続くことから、今後の校舎等のメンテナンス等については、計画的に進め、採用、人件費についても慎重に検討しつつ運営を行う。
- ・2017年度末に南校舎1Fをイングリッシュラウンジとして整備し、国際特別授業での使用ほか、自習スペースや種々の活動スペースとして今後開放する。
- ・インフラの整備・補修・改装のための予算計画に基づき学費を改訂した。今後はインフラの使用について、より多角的・多目的な使用も検討し、大阪市内中心をいう立地を活かしステークホルダー（生徒・学生・教職員、同窓生、地域住民など）へ開かれた使用も視野に入れつつ、持続可能な施設の使い方を検討する。
- ・働き方改革の一環として、遅くなりがちな教員の退勤時刻の管理について検討した。
- ・育児休業、時短の利用者が毎年いる状態で、勤務の継続が図られている。